

山

本

記

山

本

記

○山本記所載人名抄（默菴録）

上方勢

熊野勢

仙石權兵衛

尾藤久右工門

羽柴秀長

青木勘兵衛

藤堂與右工門

蜂須賀彦右工門

宇野若狹守

杉若越後守

片山三門

服部市兵衛

桐野孫作

藤堂主殿

中島吉郎太夫

井尻三太夫

根来
原 右京

片山香明院

湯川直春

横矢六郎

真砂庄司

目良淡路守

山本主膳

廣畑福右工門

三栖市之丞

山本平助

安宅左近

熊代左近之丞

貫 刑部

鈴木左右工門

笠松甚助

田上右京之助

深見 又二郎

田上五郎太夫

真砂次郎七郎

田上由元老

玉置図書之助

田上吉之丞

田上甚太郎

田上平太夫

田上久太郎

玉置主殿之助

玉置藤十郎

深見新工衛門

森 福太夫

原 四郎右工門

堀 重工衛門

笠松樗太夫

栗山三郎次郎

田畑六太夫

脇田六郎右工門

小切間左近

林 兵庫

島 左近之丞

玉井新兵衛

玉井掃部

加藤大藏

津村 某

高垣 某

丸山 某

山本權之助

湯川五郎

鈴木刑部

勝田三郎

糸川右工門

榎本治部

丸山主木

龍神三郎太夫

玉置永直

○山本記目錄（默菴録）

岩田川原ノ合戦ヨリ主膳頭下川引籠マテ	（1）
塩見峠ノ合戦ヨリ上軍引揚マテ	（3）
直春康忠等謀殺セラル	（4）
湯川山本ノ残党泊城ヲ攻ム	（6）
田上由元玉置図書殺サル	（7）
山本家ノ墓所	（8）
山本氏ノ系図	（8）
龍松城	（9）
山本氏所領	（11）
古城趾	（11）

紀南文化研究第二卷第六号 『吉野朝と紀州山本家ノ誠忠』ト
題スル記事ニ 山本氏ハ源氏ニ始テ 源義定近江守トナリ江州
山本郷ニ住ミ因テ氏トス 数代ノ後忠行封ヲ熊野ニ受ケ 熊野
八莊司ノ一人トシテ本宮ニ居リ 大塔宮ノ旗下ニ忠勤ヲ励ミタ
ル事ノ記事アリ

(一九三八年昭和十三年六月号)

○山 本 記

岩田川原ノ合戦ヨリ主膳頭下川引籠マテ

天正十二年（一五八四年）豊臣秀吉ヨリ仙石權兵衛、尾藤久右衛門尉ヲ田辺ニ差遣シ湯川、山本其他ノ豪族ニ使ヲ以テ出頭ヲ促サル。山本家ニ於テハ重臣ヲ名代トシテ出シ、大濱ニ於テ会见シ、早速出仕可仕旨約束シ、両使ハ直チニ引返シケリ。然ルニ山本、湯川其他豪族共相約スル所アリ、一致ノ行動ヲ取リテ、故至ニ時日ヲ迂延シテ出仕セス、遂ニ其年モ暮ケレハ、秀吉大ニ怒リ、明ケテ十三年三月羽柴秀長ヲ大將トシテ仙石權兵衛、青木勘兵衛、尾藤久右エ門、藤堂與右エ門、蜂須賀彦右エ門、宇野若狹守、杉若越後守ヲ部將トシテ数万騎ヲ率ヰテ紀州ニ來攻シ、先ツ根來寺ヲ焼キ討ニシ、尋ニ太田城ヲ水攻メトシ、日前國懸社ヲ破壊シ、明王寺ヲ焼却シ、尋テ國中ヲ掃蕩セントス。

四月七日仙石、尾藤、藤堂、横須賀、宇野、青木、杉若ヲシテ水陸ヨリ熊野ヲ征セシム。諸將進シテ田辺ニ陣シ四方ノ神社、佛閣ヲ焼拂ヒケレハ、大ニ生キタ心地モセス、恐レ戦キ所在風ヲ望ンテ帰服セリ。独リ湯川直春ハ日高郡小松原村丸山城ニアリテ屈セス、士氣ヲ勵マシテ云ク、我家ハ源氏ノ末流ナリ。我ニ至ッテ十三代末々曾テ武勇ノ名ヲ汚シタル事ナシ。今一戦ヲ試ミスシテ降ル、豈ニ末代ノ耻辱ナラスヤ。ト藤代、蕪坂、鹿ヶ瀬ノ諸嶮ニ據リ防戦セントス。然ルニ其防脩未タ成ラサルニ、秀吉ノ大軍既ニ殺到ス。直春牟婁ニ奔リ、近露村ノ横矢六郎ニ頼リ、尚眞砂庄司等トモ力ヲ合セ潮見峠ノ嶮ニ據リテ敵ヲ待ツ。此地嶮ニシテ防戦嚴ナリ。秀長即軍ヲ分チテ仙石、尾藤、藤堂ノ諸將千五百騎ヲ以テ之ヲ攻メントス。

此時ニ方リ、目良淡路守手兵ヲ以テ秋津川中峯城ニ防戦シ、一方山本主膳頭ハ市之瀬城ニ據リ上軍ニ抗セントス。茲ニ於テ又蜂須賀、宇野、杉若等千五百騎ヲ以テ市之瀬ヲ襲フ。杉若越後守先某臣片山三門ヲシテ大門谷ニ陣ヲ布カシメ、市ノ瀬城ノ様子ヲ窺フ。一日斥候ノ爲メ騎馬武者一

騎ヲ差越シタルヲ、山本家ノ臣廣畑右エ門之ヲ斬リ、又次ノ日歩行ノ斥候一人来リタリヲ三栖市之丞之ヲ討取リヌ。杉若越後守大ニ怒リ四月晦日進ンテ岩田村三宝寺ニ陣ヲ構ヘ、上岩田ニ押出シ次第ニ市之瀬龍松城ニ迫ラントス。此方逸早く大芝(市之瀬村)ニ出張リ川ヲ隔テ、上軍ト對陣ス。此頃富田川ハ数日来ノ降雨ニテ濁水岸ニ漲リ居ル處、上軍ハ氣ツカヒテ敢テ越エ来ラス双方兩岸ヨリ鉄砲、弓ヲ放チ合フノミナルモ、此時我軍ヨリ熊代左近丞、岸ニ立チ呼ンテ曰ク

此川サシモ深川ニモアラズ、川水岸ヲ洗フトモ何事カアラン イザ吾真先ニ瀬踏セン
ト黒毛ノ馬ニ打乗リ緋威ノ鎧着テ、堂々ト押渡リ敵前ニ突進シタリケル。續イテ貫刑部、鈴木友エ門(官右エ門ト書セル書モアリ)笠松甚助(與太夫トモセルモアリ)其他ノ面ニ我劣ラシト押渡リヌ。此時熊代左近之丞一トキハ大音ヲ掲ケテ叫ンテ曰ク

我主山本康忠ハ存念ノ上秀吉公ニ從ハス、假令此戰ニ勝チタリトモ、運ヲ開カントモ、運ヲ開カントモ思ハレス、命ハ誠ニ依テ輕シ、花々シク合戰シテ名ヲ殘サン計リナリ。我ト思ハシモノハカク申ス熊代左近ト組ンテ熊野武士ノ手ノ内ヲ見ルヘシ

ト、此時之ニ應シテ寄手ノ内ヨリ井尻三太夫ト名乗リ、走り出テタルヲ熊代見カケテ渡リ合フ間モアラセス、池尻ヲ馬諸共引寄せ一刀ノ下ニ首撥切り、之を掲ント差シ掲ケ

此瘦首取ツテ何□セン

トテ カラ／＼笑ヒ敵中ニト投ケ込ミタリ。寄手之ヲ見テ大ニ怒リ山本勢一騎モ殘ラス討取シト関ノ声ヲ上ケテ互ニ追ヒツ返シツ戰ヒケル。田上右京之助ハ寄手ノ勇士服部市兵衛ト切り結フ間モナク、市兵衛ノ首ヲ打落シ「深見又太郎ハ桐野孫作ト名乗ル強者ト槍ヲ會セケルカ之レ又強兵ニシテ川端ニ於イテ孫作ヲ突伏セ討取リヌ。

既ニシテ山本勢ニ於テ一騎當千ト頼ミツル田上五郎太夫、眞砂次郎七郎等勢ニ乗シ、余リ深入シテ取囲マレ遂ニ討死ス。

我軍ハ後ニ大川ヲ扣ヘ、所謂脊水ノ陣ヲ布キ一步モ退カス爰ヲ先途ト戰ヒケリ。上軍追々ト勢ヲ増シ攻メカケル間、味方モ苦戰ノ限リヲ盡ス折柄、豫テ伏セ置キタル百姓足輕ノ一隊、此急ヲ見テ山手ノ方此更カシコノ木影物影ヨリ一斉ニ鉄砲ヲ放チケレハ、寄手ノ步調漸ク崩レ、敵多シト見シカ、コハ叶ハシト死傷ヲ見棄テ、三宝寺マテ引返シ、大内谷ノ陣ヲ固メケル。此一戰寄手

死傷夥シク、味方ニ於テモ田上三郎太夫、眞砂次郎七郎、並ニ足輕一人都合三人討タレケリ。
五郎太夫ハ何カ仔細アリテカ前夜ヨリ甲ノ緒結ヲ切ツテ討死ノ覺悟ヲ示シケルカ、砂ノ如ク大勢
ヲ斬リヲキタル上討死セリ。
其後寄手ハ次第二増加の様子なるに依り、主膳頭ハ、栗栖川四番ニ引籠リ、麦粉峯ニ木戸ヲ構ヘ、
敵ヲ一騎打ニ難所ヘ誘ヒ込マンントス。然ルニ此地場所餘リニ狭ク働キ自由ナラストテ下川村ヘ
引移リケリ。寄手之ヲ知り後ヲ追カケ来レルヲ山本勢ハ鍛冶屋川硯橋ヲ引ハスシ、敵ヲ待チ受ケ
タリ。山本平助（兵介トス）、熊代、深見ハ小野村、沢村ノ野山ニ引籠リ鉄砲ヲ打チカケヘレハ、
敵兵近ツケス、討タル者多クシテ勝目ノ手タテモナク、叶ハシト思ヒケンハ、遂ニ田辺ヲサシ
テ引返シケル。

塩見峠ノ合戦ヨリ上軍引揚マテ

左ル程ニ別軍仙石權兵衛、尾藤久エ衛門、藤堂與右エ門等千五百騎ヲ牽キテ、五月朔日近露村ナ
ル湯川、横矢ヲ攻落サントスルヲ聞キ、湯川直春ハ横矢六郎、眞砂庄司及安宅左近ト力ヲ合セ、
塩見峠ニ出張リテ陣ヲ敷キ居リシニ、寄手之ヲ見テ小松原ヲ逃去リタル湯川、何程カアラント塩
見峠ノ坂ヲ声ヲ上ケテ登リ来レリ。湯川方ニハ田畑六太夫、脇田太郎衛門、小切間左近、林兵庫
等矢先ヲ揃ヘテ射落セハ、仇矢一本モナク、其上足輕百姓木陰ノニ忍寄り、弓鉄砲ヲ乱射シケ
レハ、恰モ的ヲ射ルヨリ易ク、瞬ク内ニ死傷山ヲ築キ、驚ク所ヘ直春モ邀討ツ、進メ者トモト下
知シケレハ、島左馬之丞、玉井新兵衛、平井掃部、加藤大藏、津村、高垣、丸山等一度ニドツト
追下シ、指詰メ射下シケレハ、空矢一モナク立チ所ニ數百名ヲ討タレ、峠ヲ後ニ我先ニ逃下リ、
田辺ヘト引返シケル。湯川方ニ於テハ田中重太夫、但馬是富等ノ士討タレケリ。

要スルニ山本、湯川勢ハ小勢ナレトモ、地ノ理ニ明ルク山野ヲ自由ニ馳驅出沒シ、心ヲ一ニシテ
戦フ故、其度毎ニ勝タサルハナ、寄付ハ多勢ナレトモ、地理不案内ニテ手ダテノ施シ様モナク、
攻メアグミ両軍対峙スルコト數十日、七月中旬ニ至リ最早萬策ツキテ和議ノ申出テアリ。両家ト

モ所領安堵ノ沙汰追テアルヘシト約シ置キ、杉若越前守ニ泊城ヲ守ラセ置キ、全軍都ヲサシテ引揚ケケルコソ笑止ナレ。

其後山本主膳頭ハ其儘下川村ニ引籠リ、湯川直春ハ亦田辺置奥三ヶ莊ニ籠居シ、何レモ家中面々ニ一先ツ暇ヲ賜リ時ノ至ルヲ待ツコトニセリ。

直春・康忠等謀殺セラル

(一五八六年)

天正十四年戊二月秀吉ヨリ藤堂佐渡守古文書ニハ多ク和泉守トセ
ルハ誤リ後ニ和泉守トナルヲ田辺へ差越サレ湯川及山本ノ籠居

ニ使シテ云ハク

何レモ本領安堵トアルヘキニ付大和郡山城へ参ルヘシ

ト、爰ニ直春譜代恩顧ノ郎黨共喜悦ニ思ヲナシ、爰カシコヨリ馳集マル者其数三百餘人、主君直春ノ御供シテ和州郡山へ相上リ各々町屋ニ宿ヲ定メ其沙汰ヲ待チ居タリケリ。直春今ハ浪々ノ身ニシテ是等ノ諸士ニ兵糧ヲ給スヘクモアラネハ、各自飯米持参ニテ相詰メ、主家安堵ヲ今カクト待チ佗ヒケリ。其内ニ飯米モ盡キ、且ニ暇ヲ告ケテ帰國スルモノモ少カリキ。

サル程ニ熊野ヲ出ラレ時三百餘人ト聞ヘシカ、今ハ早ヤ殘リ少ナニ兎ヤ角ト行末心細クゾ、思ハルゝ折柄、七月十六日ノ夜ノ食事ニ毒藥調合セラレ、遂ニ直春主従十数人アヘナキ最後ヲ遂ケニケリ

此方山本方ヘモ藤堂佐渡ヨリ使アリ、康忠公家臣ヲ集メテ評議ノ末覚悟ヲキハメ郡山へ参ルコトゝス。藤堂佐渡守下川村ナル康忠公ノ籠居ヲ訪レ、同道ニテ出發セリ。此時藤堂ノ勸メンハ多人数ニテハ穩便ナラス重立チタルモノ少数同伴セラレヨトアリシカハ家臣十四人ヲ引キ具シ、田上由元老、玉置圖書之介、其他ニ市ノ瀬城ヲ守ラセ置キ、日ヲ経テ郡山城下ニ到着シヌ、直春ト同シク旅舎ニ宿シ拝謁ノ沙汰ヲ待チ暮スコト三ヶ月餘、何ノ沙汰モナク不安ニカラレ居ル矢先、七月十六日ノ夜直春主従皆毒害サレタリト聞キ、愈ニ謀ラレタリ臆テハ我等ニモ其害ハ及ハムコト

必セリ密口帰國セント相決シ、一通ノ書置キヲ城中ニ届ケ置キ、七月二十二日朝郡山ヲ發シテ帰國ニ途ニツキタリキ

「書置ノ文面」

我レ市之瀬城ヲ玉置圖書ニ預ケ置キ永ク此地ニ詰ルコト心モトナク存スル故一先ツ罷下リ又追ツテ改メテ上リ申サン云々

此日七ツ過キ紀和ノ國境峠ノ城（今ノ待乳峠ノコトニテ其當時一時藤堂佐渡守ノ居城タリ）ノ前ヲ通返セントスルヤ、豫テ手配ヲナシテ心得テル佐渡守、イカデ無事ニ此處ヲ過サスヘキ。即チ山本主従ヲ待チ受ケ懇セン已力館ニ一泊ヲ勸ム、此方今更卑怯ノ振舞ニモ出テ難ク。請セラルカ儘ニ随ヒヌ。田上右京之介ト熊代左近之丞トハ、佐渡守ノ伯父主殿ト申ス仁ノ館ニ泊リ、其他田上吉之丞、同甚太夫、同平太夫、同久太夫、玉置主殿之介、同藤十郎、深見又太郎、同新右エ門、森福太夫、原四郎右エ門、堀重右エ門、笠松樫太夫等ハ主君康忠ト共ニ本陣ニ入り、イト鄭重ナル響應ヲ受ケ先ツ康忠公ヲ風呂ニ導キタルカ、カクスル處ニ郡山ヨリノ追手モ来リ佐渡守ニ内通シ、二重三重ニ浴室ヲ取囲ミ関ノ声ヲ上ケテ四方ノ壁ヨリ数條ノ槍先ヲ刺込ミヌ。康忠此様ヲ見テ最早是レ迄ナリト覚悟ヲ極メ、矢庭ニ切腹シテ相果テタリケリ。享年二十五歳トイフ。此声ヲ聞テ驚ク面々 憎ムヘキハ佐渡守ナリイザ討捕リ呉レント 奥ノ間サシテ切り込ミタリ。此時佐渡ノ方ニモ豫テ用意怠リナシ数十人ノ討手コゝカシコヨリ顯レ出テ佐渡討セシト、斬合相戦フコト半時餘ニシテ討手ノ者三十六人ヲ切り伏セ大勢ニ手ヲ負ハセタル後皆討死ス。

中ニモ熊代左近之丞ハ主殿方ニテ十三人ヲ斬殺シタル上自刃ス。田上吉之丞ハ本陣ニアリテ亦十三人ヲ斬リ伏セタル後敵ノ手ニカゝランヨリハト、悠々トシテ城ノ裏手ナル小丘ニ上リ自刃シテ相果テケリ

田上右京之助ハ所存モアリテカ、此處ヲ切抜ケ落チ行キタリ。深見又太郎モ同シク切抜ケ高野ヲサシテ落行ケルカ、不動坂ニテ追手ニ追詰メラレ、遂ニ翌二十三日ノ未明打取ラレタリ。

右京ハ晝ハ山ニ伏シ夜ハ野山ノ道ヲ走り二十四日ノ朝龍套城下ヘ歸リ着キ、郡山コト峠ノ受難ヲ委シク告ケケレハ、皆モ無念ノ涙ニクレニケリ。早速湯川方ニ栗山三郎次郎ヲ通シテ之ヲ知ラセ、共ニ亡君ノ恨ミヲ晴ラス事ニ話ヲ決セリ。

湯川記ニ右京ヲ湊右京ニ作り峠ノ城ヲ切抜ケ歸リ、郡山ニテ直春毒害、峠ニテ康忠謀殺ノ有様ヲ語ル云々トアルモ之レハ誤傳ナリ

湊右京ハ湯川四奉行ノ一人トシテ直春ノ行動ニ随ヒシナランモ、他家ノ一行ニ加ハリ峠城ニ来リタリトハ思ハレス、筆者ハ田上右京ト湊右京トヲ混同シタシモノナラン。

湯川、山本ノ殘党泊城ヲ攻ム

湯川家ヨリ栗山三郎次郎、山本家ヨリ山本權之丞名代トシテ相諮リ、両家ノ殘士ヲカキ集メ総勢二百餘騎山本判官(權之丞)ヲ大將トシテ七月晦日泊ノ城ニ押寄せタリ。城主杉若越前守ニ於テモカヽル不時ノ備トシテ、此頃頻リニ浪人共ヲ集メ、殊ニ根来ノ浪人原右京、片山智明院某ナル勇士ヲ召抱ヘ居レリ。折柄大勢攻来ルト見ルヤ、原右京守ル處ニ進ミ出テ大声ニ叫ヒハメキ曰ク、各々方如何ナル仔細アリテカクハ寄せ来リ給フゾ。越後守ニ向フ事ハ蟻螂ノ斧タルベシ、弓弦ヲハヅシテ速ニ降参セヨト申ケレハ、寄手ノ方ヨリ湯川五郎(湯川記ニハ太郎トアリ)馬ヲ進メテ曰ク

我々弓矢ヲ以テ勝負センコソ本意ナレ、何ヲ以テ毒害詐計ヲ用キテ湯川山本ヲ殺シタルカ、前代未聞ノ奇怪事、武士タルモノノナスヘキ所業ニ非ス君辱ラルレハ臣死ストカヤ、我等永ラヘテ何カセン、寄タルハ身代リニ越後ヲ討取テ亡君ノ恨ヲ晴サン爲ナリ

ト言ヒモ果テズ、山本權之丞先ニ立チ、鈴木刑部、勝田三郎、糸川右エ門、榎本治部、丸山主水攻上リ、一騎殘ラス打取ント鉄砲キヒシク打カケヽル。

原右京ハ栗山三郎次郎ト槍ヲ合セ、シバシガ間繰ミ合ヒケルガ、栗山遂ニ討タレケリ。笠松甚介之ヲ見テ大ニ怒リ、岩攀チ上リ右京ニ渡リ合フコト小半時難ナク右京ヲ突殺シタリ。片山智明院ハ既ニ龍神三郎太夫ノ爲メニ打止メラレ

猶モキビシク攻メ立タリ、折柄越後守ノ内方ハ軍見物セント矢積間トリ見ル所ヲ龍神三郎太夫喜ヒ射放チタル矢誤タス弓手ノ眼ヲ貫キタリ。此時城中ヨリ中島吉郎太夫ト名乗リ出シ丸山主水ト

鐘ヲ合セタルガ、丸山ノ爲ニ馬ヨリ突落サレ、アハヤ首カヽレントスル處へ、城兵ドット押出シ中島打タセシト八方ヨリ打掛ル。此方寄手ヨリモ丸山ウタセジト岩打ツ浪ノ如ク一度ニ打寄せ攻メケレハ、主水モ若キ命助カリタリ。

サル程ニ越後守タマリ兼ネ城門ヘト引退キ、木戸ヲ打チテソ防キケル、寄手ハ城ヲ取り巻キ鉄砲打懸ケ今宵ノ中ニ攻メ落サントモミニモンデゾ攻メニケル。カヽル處ヘ日ノ暮レ方ヨリ一天俄ニカキクモリ、雷雨烈シク海上怒濤山ノ如ク、天地震動セシカル、敵モ味方モ戦キソメキ、心ハ逸レド降雨ヲ防カンテタテモナシ、何レモ軍ヲ引イテ陣屋ニ退キケル

越後守ハ其後城壘ヲ固メ脩ヲ嚴ニシケケバ寄手モオノズカラ力衰ヘ皆散タニナリテ引退キヌ

田上由元、玉置図書殺サル

泊城攻撃ノ後湯川山本ノ武士ハ四方ニ離散シ、中ニハ流浪ノ身トナリ旅ニ去ルモノアリ、又ハ甲冑ヲ棄テヽ農ニ帰シ、工ニ搏スルモノアリ、爰ニ身ヲ潜メ自我ノ安全ヲ計レリ

田上右京之助ハ御台所及一子因幡ヲ護リ、一時市之瀬汗川奥ノ黒岩ニ潜ミ居タルモ又逃レテ周参見村廣瀬ノ里ニ隠ル

一説ニ康忠ノ遺子一男二女アリ、其男長シテ越前宰相彦康卿ニ仕ヘ、山本作兵衛トシテ食禄一千石ヲ食ミ、其子孫今ニ福井市ニ住居セリト

爰ニ田上由元(右京之助ノ父)ハ法躰ノ身ニ在リ、玉置図書之助ハ日高郡和佐ノ城主玉置永直ノ次男ニシテ、康忠ノ爲ニハ母方ノ伯父ニ当ル。康忠若年ノ時家中騷動アリ暫時後見役トシテ差越シタル仁ニシテ、永直ハ早ク秀吉ニ降リタル關係ヨリ、其害ノ及ハサルモノト思ヒ、家中面ニ離散ノ後二人ニテ市ノ瀬ニ居リ世ノ形勢ノ推移ヲ窺ニ居タル折柄、翌十五亥秋(十一月)杉若越前守ノ討手トシテ差越シタル根来ノ福淨院法師ノ落武者七八騎ニ襲ハレ、兩人遂ニ討死セラレタリ

斯ニテ紀南ニ於ケル名家山本氏モ十六世ヲ以テ康忠公ニ至リ滅亡ス、其臣故ニ一時他国ニ逃レ、又ハ山中ニ潜ミテ農工ニ帰シ、競々トシテ月日ヲ送ルコト十四年、其間ニ於テ秀吉薨去世ハ徳川

氏ニ帰シ、慶長五年(一六〇〇年)淺野幸長封ヲ紀伊ニ受ケ、老臣淺野左衛門之佐牟婁ノ代官トナルヤ、杉若越後守ハ追放セラルヽニ至リ、皆再ヒ原住ノ地ニ復帰シ各自ノ地ヲ治メテ生テ姿ヲスルニ至レリ

山本家ノ墓所

西牟婁郡市ノ瀬村元龍松城山麓一乘院大師堂ニハ山本家十四世ノ祖先ニシテ市之瀬ノ城主タリシ
義廣公以下三代ノ墓アリ
義廣公 廣信公 忠朝公 ノ墓ハ五輪塔
康忠公石碑ニシテ

法名 一乗寺殿古國清嚴大居士

裏二天正十五年(一五八七年)丁亥九月二十一日トアリ之レハ戦死ノ翌年本葬セシ時ノ年号ナラン
石碑ハ元禄年(一六八八〜一七〇四年)間田上右京之助四代ノ孫吉郎右エ門甚正ノ建立セシモノナリ

山本氏ノ系譜

矢田判官義清

新羅三郎ノ二男本国近江

九代マテ略

十代山本判官忠繼

楠公ニ属ス、後四条中納言ノ部将トナル

十一代 右京之亮忠茂

(一三七八年)永和四年細川氏春ト土居城・小沢城ニ戦ヒ撃テ之ヲ退ケ
斬首五十 吉野ニ敵ス

十二代 讃岐守忠義

(一三九二年)明德三年南帝入京ニ扈從ス

十三代 判官義豊

十四代 左右衛門太夫義廣
(一五五四年)天文廿三年畠山植長ノ任ニ就クヤ爲ニ湯川玉置ニ氏ノ
無礼ヲ資ノケ之ト戦フ

十五代 掃部之介忠朝

十六代 主膳頭康忠

子 因幡

（一五五八〜七〇年）
永禄年間 島山氏ト扁シテ三好ト戦フ
宮川原小山ヲ助ク（此項疑アリ）

一部ニ越前小字相府鷹ニ住ム山本作兵衛ト云々一千石ヲ食ミ
其子孫今ニ福井市ニ在ルト

山本氏ノ主ナル家臣

城代家老

田上右京之助

屋敷

市ノ瀬 峯[?]屋

家老

田上吉之丞

全

鮎川ノ加茂

全

熊代左近之丞

全

市ノ瀬 上平野

全

玉置圖書之介

全

岩ノ屋

山本兵部之介

岩田城

山本権之丞

生馬城

玉置圖書之介

屋敷

城下

田上岩之丞

全

鮎川

井濶 清助

全

岡

山本 式部

堅田城

内ノ川平兵衛

内ノ川城

富田ノ鴻ノ巢城ヲ守ル

楠本太郎

龍ノ口城

龍松城

（一五三二〜五五年）
天文年間 治部少輔山本忠朝之ヲ築ク

（一五八五年）
天正十三年落城

市之瀬村ニ在リ

城ノ模様

本丸 長四十間 横二十一間

二ノ丸 長七十間 横廿五間或ハ三十間

南表ヨリ西北ニ廻切堀アリ南切長サ百五十間横幅十間深サ一丈五尺

山ノ腰ニ武者溜アリ二丁四方ノ壇ナリ

二ノ丸 大手ニ龍松トテ老松アリ地ヲ祓フコト一丈許リ寅方ヘ横這ヲナス三間山ヲ龍ノ如ク

卷懸ケテ門ノ冠木ノ如ク見ユ龍松山ノ名之ニ依テ起ルト云

二ノ壇 南扣ニ井戸アリ又馬浴シノ大井戸アリ何レモ常ニ滾々トシテ水ヲ湛フ

此東ハ峩々タル岩カゲニテ峯筋ハ一騎打ノ難所々々ニ堀坂アリ、東西ノ攀ヨリ表三方ハ深キ

沼田、前ハ大川ナリ 城ノ周圍ハ大樹生ヒ茂リ、東麓四丁程ハ大藪ナリ、各々敵徒襲ヒ

来ル時ハ竹ヲ削ギ伐リ其ノ株ヲ焼キ尖ラシ、又大木ヲ伐リテ縦横ニ倒シ置カハ人馬モ容

易ニ攻メ攀ルコト困難ナル一要害トナルナリ

以上ノ各項ハ昭和四年田上憲一氏（一九二九年）
大阪府豊島郡豊中町
大字山上七七ノ著『龍松城ト田上氏』ノ抜鈔ナリ、山本氏

ノ記述ニ精細ナルヲ以テ題シテ『山本記』トシ、以テ『湯川記』ニ等ス

中根 默菴

山本氏所領

紀伊續風土記ニ

朝来七箇村

岩田村、岩崎村、田熊川村、岡村、市ノ瀬村、鮎川村、小川谷村

富田莊十四箇村

栗栖川莊

北郡 西谷 眞砂 石舟 芝 鍛冶屋川 温川
内井川 小松原 高原 大川 福芝 兵生

四番莊

田辺

萬呂

日高郡ノ塩屋村萩原村等

古城趾

一龍松山古城跡

一ノ瀬村

在所ヨリ川向北乃道法五丁

是ハ山本主膳正八十一年以前

天正十三年ナリ

迄居城主膳正知行ハ朝来組 富田組 三番 四番之内

田辺組之内湊村神子濱村万呂村日高郡之内塩屋いばらきはぎ原知行いたしを由申傳候

一古城跡 山城

岩田村

在所ヨリ南當道法四丁

是ハ山本主膳正家老山本兵部八十一年以前迄居城之由申傳候テ兵部ハ岩田村一ノ瀬村之内知行いたし候

一蛇バミケ城古城跡

山城

生馬村

在所ヨリ辰巳家道法二十三丁

是ハ山本主膳正家老山本式部居城之由也傳候退轉之年曆知不申候尤式部知行所ハ生馬村以外日高郡南之塩屋にても承申候

一 鴻巣古城跡

山城

保呂村

在所ヨリ辰巳ニ當道法三丁

是ハ山本家中内野川平兵衛八十一年以前迄居城也由承リ及候保呂村内ノ川村知行致候由

一 要害古城跡

在所中ニ御座候

堅田村

是ハ山本主膳正家中堅田式部百年以前迄居城之由承リ及候堅田村を知行いたし候由

一 龍ノ口古城跡

山城

下三栖村

在所ヨリ巳ニ當り道法六丁

是ハ百五十年計以前山本康子岡村地頭楠本六郎居城之由三好勢ト一戰之時城内ニ攻入雜兵七拾三人射伏申由其合戰經其後山本抱受之由又其後熊野衆徒是城ニ居申モ時八十三年以前藤堂與右衛門青木勘兵衛宇野若狹攻落し致申候

昭和十四年（一九三九年）一月芝口常楠氏複寫寄贈せられたるもの
見え誤字少なからず 轉寫輾寫を重ねたるものと
この本は湯川記を種本として文飾を加へたるもの也 実録にあらざること明かな
り

（宇井 龍水記）

昭和十五年九月七日宇井龍水氏の蔵本を借りて寫す

默菴 中根 七郎

『山本記』の活字化を終わって

牟婁の豪族山本氏を記した『山本記』のことは以前から気になっていたが、前記お二人のコメントや、地元日高の郷土資料でないことで後回しとしていたが、本年の川辺文化協会郷土史同好会歴史講座で、講師の谷口敏雄先生が『手取城と玉置氏』玉置氏十代の歩みの中で、手取城主玉置氏と山本氏の関係を説明されたのを機会に活字化した。

既に紀南文化財研究会などで出版されていないか調べると、昭和（一九七〇年）四十五年に白浜文化センター長谷克久氏が、古座高校蔵書の中根七郎氏寫本をコピーし限定出版していることが判った。

平成二十一年（二〇〇九）年八月十五日

清水 章博

